

<b>Title</b>	図書館の森：フランス国立図書館新館
<b>Author(s)</b>	和田, 光司
<b>Citation</b>	ぱびるす 54 号(2012 年春), 2012, 1p
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3655">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3655</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

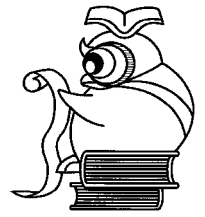
SEigakuin Repository and academic archiVE

# ぱびるす

聖学院大学総合図書館報

第54号 (2012年春)

祝卒業・  
新生歓迎号



## 図書館の森

—フランス国立図書館新館—

和田 光司

1996年、パリのセーヌ河畔にフランス国立図書館の新館が開館した。これはフランス革命200周年を巡る大プロジェクトの一環で、高名な建築家ドミニク・ペローの設計によるものであった。そのコンセプトは、図書館の中に森がある、というもので、実際にガラス張りの建物が森を取り囲んでおり、今では鳥も巣を作っている。森に入ることにはできないが、周囲の回廊からそれを眺め、読書の合間に安らぎを得ることはできる。建物の全体はちょうどピラミッドの真中を水平に切り取り、その内部を四角に空けて森を作り、四隅にそれぞれ塔をつけたという感じである。塔の形は開いた本をイメージしている。建物の外部は板張りで、ピラミッドのような階段部分や上部などどこでも腰を下ろして休むことができるし、外から中の森を見下ろすこともできる。

最初に訪れた時には、正直なところ、その大胆な構想に度肝を抜かれてしまった。この図書館の空間は極めて演劇的であって、森の他にも、例えば入口から閲覧のセクションに下っていくエスカレーターも長大なものであり、薄暗いコンクリート打ち放しの空間の中で、何か奈落の底に落ちていくような気にさえさせる。このような空間の演劇性は、この図書館だけでなく、パリの街全体にもいえることだろう。この街は絶えず新しい建設のプロジェクトを抱えているが、これまでのルーブルのピラミッドにせよ、新凱旋門にせよ、これまで人類が経験したことのない、何か新しい劇的な空間を創造し、それを世界に発信し、世界を率先していくこと、それがこの街の使命になっているように思える。少なくともパリの人々がそのような情熱によって突き動かされていることは間違いない。

ところで、この図書館の空間は恐ろしく劇的だが、その一方で利用者の使い勝手はほとんど考慮されていないのである。閲覧室はガラス張りなので、部屋全体が直射日光に照らされ、夏には日射病と戦いながら仕事をすることになる。心配なのは本の管理で、16世紀などの貴重な古書も直射日光に晒されて読まれている。また、すべての部屋が同じ平面上に収められているので、入口から自分の席までかなり歩かなければならず、参考図書室や貴重書室などの関連するセクションの配置も有機的とは言い難く、洗面所や休憩所など設備も離れているので、とにかく一日中歩き回っている、というのがこの印象である。コピーの行列など、不満を挙げればきりが無い。そのようにあくまでも見た目重視、話題性重視の建物であり、利用者への配慮は二の次、三の次であって、それもまたこの国らしいと思える。とはいっても、一日の仕事が終わって館外へ出、デッキの階段に腰を下ろしてセーヌ川を眺めつつ深く息をする時、何か生きている充実感に満たされるのも、やはりこの図書館なのである。

(欧米文化学科 教授)

## 和田先生のおすすめ本

宮下志朗『本の都市リヨン』

晶文社 1989年



図書館 2階  
023.35|Mi83

この本はルネサンス期のリヨンの出版業や文芸活動を描いたものです。ゲーテンベルクの印刷術やそれを取り巻く人々が、当時の社会や文化のなかでどのような状況にあったのか、目に見えるように示してくれる本です。